

立ち並ぶ墓標の前に額づきて

五年前の激戦を偲ぶ

この歌は、北支の山村で一個小隊が全滅したときのもの、戦地から故郷の先輩を通じて、文芸春秋に寄稿したものである。

別　　れ

入隊してから一年以上がたった。初年兵が入ってきて教育助手として張り切っていた時のある日、中隊長から呼び出された。直接我々兵が中隊長に呼ばれることはまじない。何事かと中隊長室を訪ねると、中隊長はおもむろに「実はお前の父親は、今年四月の初めに病死したと連絡があった。気の毒だが、この北支の山奥から帰るわけにはいかぬ。今日から三日間休暇をやるから、休養しながらお父さんの冥福を祈ってやれ」と。驚き以外の何ものでもなかった。入営するとき、あんなに元氣だったのに、あれからたったの十四か月、私の奉公に支障があつてはと氣遣つて、病氣になつたことも、死んだことも知らせてくれなかつた家族の心情が痛いほど身にしてみた。だれもない兵舎で、一人床にもぐり込んで止めどもな

く流れる涙をどうすることもできなかった。

岐阜の宮門前での別れが、今生の別れとなつた。

父の予言は逆の目的の中し、この世で会うことはできなくなつた。思えば哀れな別れでもあつた。後日分かつたことだが、父が亡くなる四か月前の昭和十七年の十二月に、祖父も亡くなつていた。戦争とはいえ肉親二人の死に目に会うことができなかつた。留守宅も戦争以上の苦しみを体験したことになる。平和こそがお互いの幸福の最大のものであらう。

出戦務履歴（北支の巻）

神奈川県　萱野　明

屯営生活の一端。時あたかも戦雲激動の年に直面し、日支事変より大東亜戦争に突入、皇軍は各地に転戦、国力を挙げての大戦となつた。この度は出戦務履歴として北支転出の出陣記とする。

昭和十七年四月十日、現役兵として東部第三部隊佐藤

隊(第二中隊)に入宮、九月十二日屯宮出發、九月十三日宇品港出發、九月十五日釜山港上陸、日本人小学校に一泊、国防婦人会の接待はとても嬉しかった。

九月十六日釜山港出港、九月十七日鮮滿國境の安東通過、九月十九日滿支國境の山海關通過、輸送中に歩兵第二百十九連隊へ転属命令、同日第四中隊に編入。九月二十二日河南省開封着、古都の名残りのある街だ。

連隊本部新兵舎にて一週間の教育を受け、直ちに河南省開封付近の討伐に参加、十一月七日から十一月十九日まで予東道南部掃討作戰に参加。我が軍有利に展開し八路軍を撃破して開封の連隊本部に戻る。開封市街には日本人女学校、日本人市場があり、華北交通鉄道の従業員で現地満期をされた方など沢山いる。その後開封より一〇*離れた薄酒店村に駐屯、東部三部隊から出陣した初年兵一個分隊で、長は内地屯宮に予備役に引率された横田班長であった。密偵、便衣隊が出没するのでいつも警戒を厳にする。治安地区といえども油断はできない。少しの期間の分遣隊勤務で周囲の状況も分かりかけた。十一月下旬ころ、岩谷隊(第一中隊)に配属され付近一帯

の討伐、治安維持に参加。その後、鉄道整備(開封―蘭封間)、装甲列車警乗勤務などを行い、十二月末、楊橋やんぎょう中隊復帰(早川隊)。この時の名称は北支派遣軍第三十五師団湯口部隊早川隊(四中隊)である。

中隊に到着した日の夕刻、討伐で名譽の戦死をされた鳥海上等兵が馬車(マーチヨ)に乗って白木の遺骨むなくしく帰還、最敬礼をする。

昭和十八年一月大隊本部(大毛塞)勤務、某日一個分隊で糧秣輸送を命ぜられ軽機一、擲弾筒一、一二人で行動中寒さのため輸送自動車が停止した。にわかには敵の彼方より敵の声が聞こえ、およそ道程八〇〇*の地点を多数の八路軍が進軍してきた。直ちに下車、準備、対戦に備える。そのうち、自動車快調となり乗車するが初年兵二人乗り遅れそのまま走る。安否を心配して任務を終えて帰ったが、二人とも銃剣を奪われ無残な屍となって残っており合掌する。

二月早川隊分遣隊、東漳鎮警備。三月、三劉砦警備、五月大黄河渡河、第一線中牟県後毛庄警備、敵地区の砦と分遣隊の距離約六〇〇*、八路軍の歩哨交替が肉眼で

よく分かり、夜間匍匐にて手榴弾がよく飛ぶ。電線工事中、古年兵が狙撃され名譽の戦死をされる。

黄河からの直線奥地は鄭州、洛陽、重慶に結ばれていたが、その間の途中まで進撃し度々占領しても、糧秣輸送が困難なため余儀なく撤退する。歩兵第二百十九連隊は、昭和十八年六月一日に軍令陸甲第三十六号により東第二九二九部隊編成改正下令、私はその六月に東第二九二九部隊本部勤務を命ぜられ、集成小隊三宮隊に配属、付近一帯の討伐に参加、その他は開封城内の城門警備歩哨に従事する。

また九月二十日から、十月二十一日までの一か月間、第十二軍十八秋掃蕩、掃討作戦に参加、敵との交戦激しく、特に夜間は大坂の自動車部隊多数長蛇をなし敵を圧倒す。昼夜の別なく歩兵は前進、前進を続け奥地に進入、至るところ戦車壕が掘られ、ある戦闘で私は深い溝壕に落ちた。江南作戦で敵と組み打ち功勞金鶏勲章の栄に浴した伊藤延彦上等兵が、はらばいで小銃を出して飛び上がれといわれ、救助された。この伊藤上等兵殿が戻ってくれなかつたら、恐らく絶命していたであろう。

我が軍の絶大なる戦果に敵は散乱して敗走し、威武堂々開封に進駐する。十月寒河江隊（第五中隊）配属、分遣隊勤務、鉄道警備、その後十一月二十二日から十二月十八日まで滑県付近別杖作戦の掃討に参加した。これは騎兵旅団が敵襲により全滅に等しい状態との報により徐州、濟南、商邱、幾徳と続く十八秋作戦である。払曉戦も幾度か強行、敵の心臓部をつき死者数も多くあったが、我が軍もそれにも増して相当の犠牲者を出した。そして夜の屍衛兵では残念無念の心持にかられ、合掌とともに淋しさがこみあげる。ただ成仏を祈るのみ。

掃討作戦も、またまた我が軍の勝利のうちに終わり、十二月開封部隊本部に復帰する。この作戦で寒河江隊の村岡忠良上等兵（埼玉県川越市出身）が満期除隊も近く練兵休とあって、私が交代して出陣したのであるが、とても感謝された。村岡さんは除隊した後、私の横浜の留守宅の老父母にわざわざお礼の挨拶に来られたという。

作戦後、十二月から昭和十九年三月の南方転戦まで、引き続き城門警備歩哨、衛兵所の任務を遂行する。治安地区のため城門歩哨は日本軍を重点的に置き支那警官一

人、支那婦人警官一人にて立哨し、良民証を發行、出入りの農民の服装、携行品の検査に当たる。北支河南省では作戦出動以外は約一年間衛兵勤務につく。城内は開封市街の繁華街が城外は農民（良民）が居住して各部落の数の多いことおびただしい。城門は北門、南門、東門、西門とあり、北門は日本軍、日本人居留民、支那人など一番通行の激しい所なので軍紀も厳しく、また巡察の度合いも多く重責の衛兵所である。

次に密偵、便衣隊などが出没する南門である。農民は二〇里、三〇里の奥地から野菜、衣類、薪、卵、油、粉、穀物などを天秤、一輪車などで街に売りにくる。そして帰りには妻子のためにおみやげの珍しい品物、お菓子、塩などを買ってゆく。当時の支那大陸では砂糖、岩塩などは特に貴重品として扱われていた。

城門は朝八時開門、夕方五時閉門、南門では私が立哨する朝などは、門の外に長蛇の列をなして開けることぞろぞろ入ってくる。日本軍が物品を掠奪しないことを知ったからで、部落から部落へ伝言していた様子であった。

この南門には可愛らしい少年、少女、小輩が衛兵所の食事当番をしていた。コゲむすびが食べられるので喜んで毎日通ってきた。名前を太郎、花子と日本名をつけて家族同様に扱ったので日本語も覚えて重宝がられた。支那民族では、その当時は余程の階級の家以外は、みんなアワ、コウリヤンを主食としていた。余談ではあるが作戦、討伐にゆくと家屋の壁に「抗日毎日打倒排除」とよく書かれていた。このころは支那大陸は日本軍、支那正規軍それに活動家の八路軍と三軍が三つ巴になって戦闘をし、農民は八路軍（パーロー）に、貯蔵してある食糧（冬季補給食）を奪われて苦しい生活をしていた。このため七、八歳の子、小孩までが牛馬糞を道端で拾い、それを乾燥して売ったり、一粒の南京豆でも道で拾って集めていたことを今更ながら思い出す。

この古都開封県では、市街地は日本軍隊の治安維持のお陰で平穏な日々が送れると感謝される。そのように嚴重に取締まりをせぬと八路軍が思うままに活躍するため、住民が不安な生活を送らねばならぬからで、大人多々、シエ、シエと心から喜ぶ。

昭和十九年三月三日、河南省中牟県掲橋中隊復帰、一週間後中隊出発、南方転出のため集結地開封に向かう。中隊長岡木史郎三月十三日開封出発、その際に開封市長が、私に記念品として掛軸を贈呈するといわれたが、南方にてどのような身になるかわからないからと、ご好意に感謝しつつ辞退した。

三月十五日青島着、桜丘に集結、二週間作戦準備のため滞在、玉兵団（南方派遣）第二方面軍直轄、青島港出帆、輸送船三池丸に乗船する。

たかが紙きれ されど紙きれ

兵庫県 本庄 昇

昭和十三年に勅令第一三九号による「陸軍予備士官学校令」が施行されると、甲種幹部候補生は陸軍諸学校に入学することが、義務付けられることになった。

この適用第一期生の我々は、無事教育課程を終了し、姫路に帰って見習士官に任官された。昭和十四年四月、

在姫歩、騎、砲、輜重の見習士官たちとともに、北支に駐屯していた第十師団ならびに第一百十師団の予備役将校の補充要員として勇躍？ 征途についたのである。

天津に近い太塘に上陸して貨車に乗って北京の停車場に到着したときのことである。「名前を呼ばれた者は下車せよ！ 第一百十師団付を命ず」という命令が出たために、この見習士官の一団は真二つに大別され、昭和十七年の満期除隊を迎えるまでの運命を大きく左右されたのである。

名前を呼ばれたものは勇躍（今度本当に）プラットホームへ飛び出していったが、取り残された者は入学試験に落ちたように落胆して静まり返ったのである。というのは第一百十師団は北支の治安維持を担当していたのであるが、第十師団は現役兵をもって編成され、中隊長は殆ど陸士出身者で占められていた。そして日華事変勃発以来ずっと蔣介石総統の正規兵軍団と戦ってきた師団であり、現在も漢口攻略戦を終えた後に北上してきて、鄭州をにらみながら付近の治安維持を兼ねて布陣してきたのである。